

# MAPSによる関係体験の比較文化的検討<sup>1)</sup>

(予備的研究)

筑波大学心理学系

台 利 夫

## はじめに

MAPS (Make A Picture Story Method) は、背景画によって被検者がある場面を想像し、そこに特定の役割を演ずる人物画像を置き、関係を把握・体験して物語をつくる投影法である。この過程は、想像を言語のみならず動作と画像で表すので、動作をしている間に場が変り、また自らつくった画像配置によって認知が再規定され、はじめの想像が修正されるようなフィードバックをも含んでいる。これは心理劇にも似ているが、実際生活の場に近いことから、個人の関係体験の特性をポケット版的ながら具体的に・客観的に捉えうる可能性を示すものである。

従来からMAPSは臨床領域で種々の病的人格に対する個別診断の道具として用いられてきた。それはこの検査のもつ非言語的側面が、しばしば言語表現に乏しい、これらの被検者に適している点に拠ると思われる。しかしこの側面はまた言語と生活様式を異にする諸民族の人格特性を捉える、比較文化的研究の手段としても適することを示唆する。主題投影法によるこの種の研究では、TATを用いた場合がすでに報告されているが(我妻, 1964)、MAPSは、その中でも一層比較に好都合な条件を具えていると言える。

しかし、元来MAPSの理論・方法・用具・解釈は、アメリカにおいてアメリカ人の検査者と被検者を前提にアメリカ文化とそれに基く人間行動や認知・思考に発している。これを日本で実施した場合、結果について、アメリカ人に対すると同じ解釈法をそのまま当てはめることができるかどうか。それは単に背景画や画像の特性とか物語の内容について言うのではなく、むしろ解釈の観点に関するものである。

たとえば主役的な画像への同一視の理論はMAPS解釈上の重要な手がかりになっているが、日本人相互の実際関係は、一般にアメリカ人の中で同一視を仮定しようとするものではない。アメリカで日本からの滞留者の立場でアメリカ人のやりとりと接すると、本来隔てられた個別の自我が、特定の役割を通じて露わに表出するの

を見るのであり、同一視もそうした個別の自我と自我の間ではじめてとりあげるものと考え(台, 1976)。ところが日本人の場合、とくに親子の間ではむしろ幼少期以来持続する共棲的 symbiotic な関係が顕著である。それは学校や職場での人間関係にも時として出現するが、この関係ははたして同一視の理論をもちこむことができるかどうか問題である。

本研究では、上記のような問題を背景としながら、とくにMAPSを道具として、日本人とアメリカ人の反応を比較し、日本人における関係体験の仕方となるべく客観的に捉えるとともに、MAPS解釈上の留意点を確かめようとするものである。

## I. 被検者と方法

### 被検者

アメリカ人の被検者は諸種の事情で僅かしか求めることができなかった。少数例によって反応の文化的差違を捉えるためには、対象者の選択に際して個人の人格特性や精神健康度によって結果が大きな影響をうけない工夫をおこなわねばならない。そこで両者ともに健常者と精神障害者を含み、日本人の健常者例(学生)にはアメリカ人の健常者例(学生)を、日本人の精神障害者例にはアメリカ人の精神障害者例を組合せた。精神障害者については、精神分裂病・神経症・器質性精神病など診断名毎の組合せを、破瓜型分裂病や強迫神経症など各疾病の下位分類型をも配慮しておこなった。大別すれば、健常者9組、精神障害者12組の計21組である。平均年齢は日本人24.0才、アメリカ人30.8才である。

僅少数例であるため、結果の意味をどこまで一般化できるかは問題である。また、日本人は男性13、女性8であるのに対し、アメリカ人は男性18、女性3で、同性の組が13だけしかとれなかったこと、アメリカ人健常者については、原則として日本に留学して1年以内の学生<sup>2)</sup>を得るように努めたが、日本で検査したこと、アメリカ人精神障害者例は、ShneidmanのMAPS手引(Shneidman, 1952)に掲載したものであることなどの問題がある。したがってこの報告は、1つの試行的・予備的研究として位置づけられるであろう。

1) この研究は、日本社会心理学会第18回大会(1977)発表の報告を加筆・補修したものである。

2) 上智大学外国語学部学生

## 方法

MAPSはShneidmanの教示した短縮版を参照した。すなわち、検査者が順に提示する背景画は、居間・街路・寝室・白紙および被検者自身の残りの背景画(18枚)からの選択によるものを加えた5枚である。これらの背景画はいずれも人物を欠くが(ただし寝室には人の頭とも見れる黒い塊りがある)、白紙を除き多少とも構成化された場面を現している。

## II. 結果と考察

反応結果はつぎのような3通りの手続きによって処理した。

1は、各事例をとくにMAPSに現れた被検者の関係体験の仕方に注意して通読し、日本人例とアメリカ人例を比較し、両者の基本特性をとり出す。

2は、置いた画像の数や種類など、非言語的表出の側面に関して数量的に比較する。

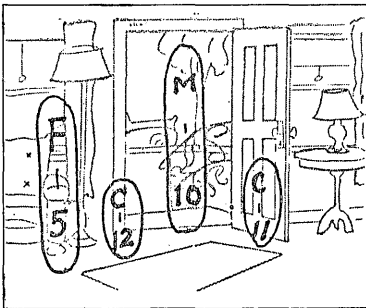
3は、事例で得た関係体験の特性をある程度類型的に要約して、あらためて全事例の反応を整理し、比較する。

### 1. 事例による比較

日本人の特性とアメトカ人の特性の差は、まづ實際例を通じて概括的に捉えることができる。以下に両者の特性を典型的に示す事例をあげる。背景画は「居間」と「寝室」のみをとりあげた。

#### 日本人学生P

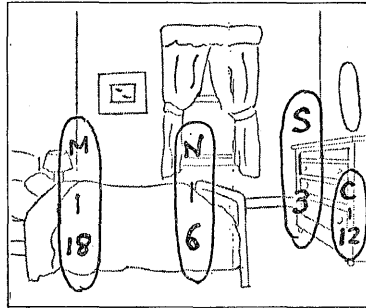
〔居間〕画像F-5:両手を口に当てている女。C-12:右手を拡げている男児、M-10:野球のバットと箱をもつ男。C-11:胸に手を当てて笑っている男児。



物語 「この人間関係は父母と子ども2人。今日はお母さんが家で留守番をしている。父と2人の子が3人揃ってデパートへ散歩に行って、いろんなことをして帰ってきたわけ。そしてドアを開けて、『今日は本当に面白かったよ』と話して、お母さんも口に手を当てて笑ってお父さんもお母さんにプレゼント買ってき…簡単な挨拶的なことをまじえて、今日あったことを椅子にでも坐って話しましょうかという。〈それで? (検査者)〉リビングルームへ行って家族団らん…」。

〔寝室〕画像 M-18:松葉杖をつく男。N-6:白い洋服で靴をはく黒人女性、S-3:顔が書かれていない女、C-12(前出)。

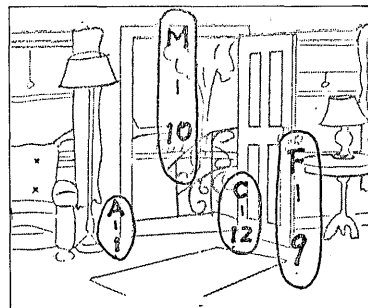
物語 「親子3人家族で、父親が半年前に交通事故で病院に入院することになった。半年病院生活を送ってきて、松葉杖ついて歩けるようになった。もう直ぐ退院だ



ということで、父親は病室の中を歩くことを練習していました。そこへ看護婦さんが見えて、『今日の気分はいかがですか』ときいて、『今日は気持がよい』と行う。看護婦さんが『お子さんと奥さんが見えています』と言って、寝室に案内して、子どもが『パパもう直ぐ退院するの』ときいて、『そうだ。もう直ぐ退院するから待っていてくれ』と…。『ほんと』と嬉しそうに子どもは微笑んで、親子3人で話すために看護婦さんは出ていった。3人はほんと短い面会時間を楽しそうに話して、母と子はお母さんが退院する日を楽しみに帰宅していった」。

#### アメリカ人学生Q

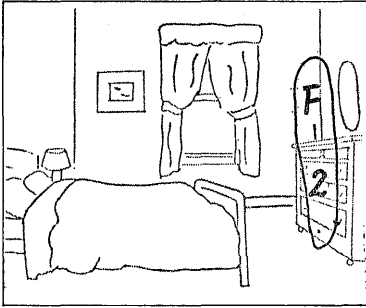
〔居間〕画像 A-1:コッカスパニールの仔犬。M-10(前出)。C-12(前出)。F-9:右手を右耳に当てている女。



物語 「この居間では、一日のハードワークを終えて多分、家族へのプレゼントを持って、帰ってきた、幸せそうな亭主を思い浮かべられます。彼はプレゼントをもって帰って、何時も家族のことを思っていること、そしてどんなにみんなが好きかをみんなに想い起させようと

しているのだと思います。忠実な犬も好きな主人を待っています」。

〔寝室〕 画像 F-2：衣服を脱ごうとしている女。

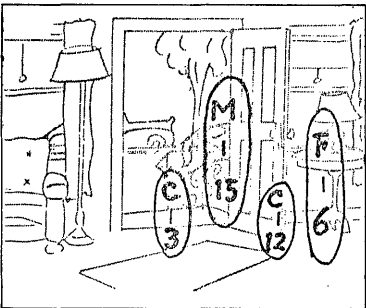


物語 『若い女性が友だちと一緒にベッドへ入ろうとしているところです。多分、彼女は彼を起して、自分が戻って来たこと、そして布団に今もぐりこんで眠ろうとしているのを知らせるべきかどうかを考えているところです』。

日本人学生Pの場合は、「一家団らん」の語に象徴化されているように、誰が主役ということもなく、肩寄せ合った生活を享受している。ところがアメリカ人学生Qの場合には、配置した画像中の特定のものをとりあげ、その人が愛情を与え、また求める場合が示されている。物語の内容としても、実際アメリカ人では、日本人のように、父が子ども2人を連れてデパートへ散歩にゆくというようなことは多くはない。

日本人分裂病者Y

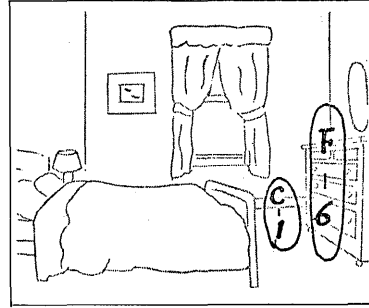
〔居間〕 画像 C-3：髪にリボンをつけた少女，M-15：ズボンのポケットに右手を入れている男，（前出），F-6：エプロンをつけ、かがんで腕をあげている女，C-12（前出）。



物語 「父が会社に出かけるところ。母が子どもたちとともに見送るところ。ふつうの人で、気持がやさしい。母はよく働く人で、子どもたちにやさしい。〈それ

から？〉父は車に乗って会社に出かける。

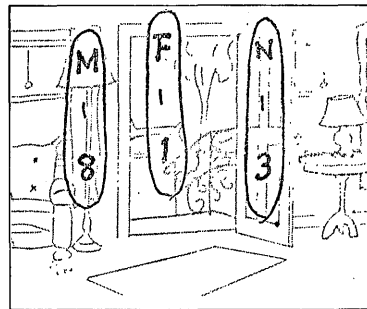
〔寝室〕 画像 C-1：手を背後にまわしている少女，F-6（前出）



物語 「ある平和な家庭で、お母さんが娘に、明日学校ですからもう寝なさい。娘がぐずついて、直ぐ寝ようとしなさい。でもやっぱり最後にはお母さんの言うことをきく」。

アメリカ人分裂病者C

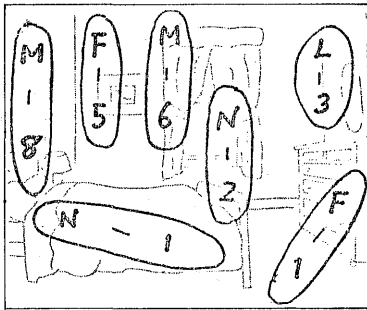
〔居間〕 画像 M-8：長い衣服を着けた牧師風の男，F-1：裸体の女，N-3：新聞を読んでいる男。



物語 「牧師と女と…男がここで何かを読んでいるみたいだ。家みたいだ。ここに椅子がある。ドアが開いていて、外に車がある。床にじゅうたんもある。男は女のことを想い、また恐らく音楽の本を読んでいるみたい。ランプがそこにある。牧師は女のことを想っている。恐らくこの女はまったく何も着てないと思う。裸なのは…着てないのは罪だろうね。これでお終い」。

〔寝室〕 画像 M-8（前出），F-5（前出），M-6：手にピストルをもって構えている男，N-2：お手伝い風の黒人女，L-3：サンタクロース，N-1つぎはぎの衣服を着けた笑いた黒人，F-1（前出）。

物語 「黒いのが牧師，壁に絵がかかっている。彼女（F-5）は手を顔の上にやって泣いている。多分、ついてない日だったんだ。夫がいたかも知れないけど棄てられた。この女はアパートの小使いだろう。黒人…黒人



の男がいる。恐らく彼の妻だろう。この男(N-6)は強盗である。この黒人はこいつを悪漢だと思っている。牧師は黒人のことを考えている。この男はピストルをもって、こっちの方に女(F-1)がいる」。

日本人の分裂病者Yでは内容が単純化し、アメリカ人分裂病者Cの例では、話の脈絡が崩れている。それにもかかわらず、前者では家庭の平和が優越し、後者では個々の登場人物の性格が優越している。

このような傾向は、日本人とアメリカ人の他のほとんどの事例について当てはまる。すなわち、概観すると健全者の場合は日本人・アメリカ人のいづれも、把握された状況全体が活気があり、画像の人物も活発に動いている。だが、日本人例では画像間の関係はむしろある全体的枠組の支え合いといった形で機能しており、それによって状況を盛りあげている。しかも、居間・寝室以外の背景画を使った場合にも、その枠組が家族的性格をもっている点が印象づけられた。

他方、アメリカ人の例では、特定画像の役割と言動がきわめて明瞭で、語り手はこの画像と同一視し、画像間の関係は、この特定画像からの働きかけ、あるいは諸地の画像からそれへの働きかけの過程をもって発展している。

そしてこの点は被検者が精神障害者であっても同様であった。関係の萎縮・歪曲・分離・孤立などが著しかったけれども、被検者の関係体験には、日本人とアメリカ人の間で相当な差が認められた。以下の若干の数的表示はこの見方を補い、裏づけるものである。

## 2. 画像と背景

画像数総計は、日本人例375、アメリカ人例265で前者が一層多いが、各人別に1背景画平均の画像数を計算して組毎に比較すると、日本人例がアメリカ人例より多い組が17、その逆が3、同数の組は1ということになり、全体として日本人例が一層多くの画像を置いていることがわかる。

つぎに背景画毎の画像数合計を比較すると、第1表のように、「居間」と「寝室」ではそれぞれ、(70:69)および(52:44)で、両者の差が少ないが、他の背景で

は日本人例がより多くの画像を用いる傾向がある。

第1表 背景画毎画像数合計比較

\*P<.05 \*\*P<.01

	居間	街路	寝室	白紙	自由 選択	計
全日本人例	70	77	52	109	67	375
全アメリカ人例	69	50	44	63	39	265
		*		*	**	

また画像の種別について両者を比べると、日本人例では男性画像が151(32.1%)、女性画像が79(21.0%)、子どもに動物を加えたものが119(31.7%)であるのに比し、アメリカ人例では男性画像が110(41.5%)、女性画像77(28.7%)、子どもと動物65(24.5%)であり、日本人例の場合にはアメリカ人例に比して子ども・動物画像の優位が想定される( $\chi^2=6.82$ ,  $P<.05$ ,  $df=2$ )。

これを背景画毎にみると、「居間」と「寝室」では全成人画像(M+F+N<sub>m</sub>+N<sub>f</sub>+I+S)が日本人例もアメリカ人例もほぼ同数である(44:43および34:35)。だが他の背景画一同く白紙では、日本人例で成人画像60(55.0%)、子ども・動物画像42(38.5%)に対して、アメリカ人例では成人画像44(69.8%)、子ども・動物画像14(22.2%)となり、日本人例における子どもと動物の数の相対的優位が示された( $\chi^2=4.74$ ,  $df=1$ ,  $P<.05$ )。

つまり画像数に基いて解釈できる点をあげると、日本人例では成人男女の他に子どもと動物を関連づけた物語が多いのに比し、アメリカ人例では男性と女性を中心とした物語がつけられる傾向がある。これが日本人例の全体としての画像数の多さに結びつくわけだが、その傾向はとくに未構成の背景画で明瞭に現れている。ただし日本人例では女性被検者が8名で、アメリカ人例の3名より多い点が問題であり、さらに数を増して検討することが必要である。

なお自由選択背景画の種類を比較すると、日本人例は提示の4枚を除く18枚中の9枚を用い、アメリカ人例は13枚を使っている。全体としてとくにある種の背景画が好まれたようには見えないが、日本人例では波に浮かぶ「筏」が6名の被検者(29%)に選ばれている。アメリカ人例ではそのような特定のものへの集中はない。日本人では選択の範囲はより狭く、そこに多くの画像を置いていると言えよう。関係体験の特性がある程度選択の種類を限定しているのではないだろうか。

## 3. 関係体験の特性の判定

一般に家庭の状況や夫婦のやりとりが期待できる「居間」や「寝室」でも、日本人例ではアメリカ人例と異なる関係をもつか。たとえば家族の相互作用の型に一般的な差違がないか。すでに記した典型例ではそうした特徴の

差を認めたと、画像数の類似という点も顧みながら、一層の妥当性をもってそれが認められるかどうかを検討してみよう。そのため、事例毎に「居間」と「寝室」をとりあげ、それぞれの物語を読んだ上で以下のような2段階の評定によって反応の特性を確かめることを試みた。評定者は臨床経験8年以上の心理専攻者2名である。

まず第1段階では、反応が、X：背景画に画像を配置して全体的状況を描写したものか、またはY：語り手が特定画像に同一視して活動し、状況を発展させたものかという、語り手の関係体験の別を、各21例について評定者の直観的印象にしたがって分類させた。

第2表は、第1段階の評定結果を比較したものである。ただし2人の評定者の結果の合計を平均してある。

第2表 第1段階による関係体験の比較  
(居間)

	日本人例	アメリカ人例
X	16.5	7.0
Y	4.5	14.0

$\chi^2=8.72$   $P<.01$   $df=1$

(寝室)

	日本人例	アメリカ人例
X	13.0	8.0
Y	8.0	13.0

$\chi^2=2.38$   $.10<P<.20$   $df=1$

表によれば、「居間」については日本人例でX：16.5に対してY：4.5で、Xの特徴が強く、アメリカ人例ではY：14.0に対しX：7.0で、Yの特徴が強い。即ち、日本人例における集団的な場面の優勢を示唆している。他方「寝室」についても、いくらかそのような傾向は見えるが統計的に有意ではない。

そこで第2段階として、反応を一層細い側面で把えて第1段階の特徴の差が以下の諸項目でも認められるか否かを検討した。これらの項目は、結果の全体を筆者が反復解読して、要約したものである。

- i. 画像の機能（状況描写が優越するか；画像の活動が優越するか）
- ii. 情意の担い手（場面の雰囲気の主であるか；画像の情意が主であるか）
- iii. 相互作用（全体的共存か；画像間の具体的相互作用か）…以上は第1段階の確認
- iv. 相互作用の種類（心情と心情の間か；行為と行為の間か）
- v. 画像の動きの精粗（微細な行動か；粗大な行動か）

- vi. 画像の特徴（画像の態度特性の把握か；画像の認知・体験の描写か）
- vii. 物語の主人公（主役は不鮮明か；鮮明か）
- viii. 語り手・画像・画像間（これらの関連は分析困難か；分析可能か）
- ix. 物語の因果関係（明瞭でないか；明瞭か）
- x. 物語の文章（第1人称が多いか；少ないか）
- xi. 語り手の自己表出（画像を通じて表していないか；表しているか）
- xii. 語り手の表出の特性（内的過程の表出か；外部活動の表出か）
- xiii. 他に必要な画像（物語中に示唆されないか；示唆されるか）

一応の仮説として、各項目の前半の設定で把えられるものは第1段階のXの傾向(⊗)をもち、後半の設定で把えられるものをYの傾向(⊙)をもつとみる。いずれとも評定のつかぬ場合は(○)とした。評定者は各事例で「居間」と「寝室」の場合の特徴について項目別に評定し、全日本人例と全アメリカ人例の総計をとって2等分して比べたのが第3表である。

第3表 第2段階の関係体験の比較

事例 評定	(居間)		(寝室)	
	日本人	アメリカ人	日本人	アメリカ人
⊗	130.5	73.5	96.5	69.0
○	76.5	65.5	80.5	72.5
⊙	66.0	134.0	96.0	131.5

$\chi^2=39.88$   $P<.01$   $df=2$        $\chi^2=10.52$   $P<.01$   $df=2$

第3表によれば、「居間」では日本人例において第1段階の評定と同様に⊗の傾向が強く、アメリカ人例では⊙の傾向が強いことが認められる。また「寝室」でも、⊗・○・⊙の間の差が日本人例では96.5、80.5、96.0と小さいが、それに比してアメリカ人例では69.0、72.5、131.5とより大きく、⊙に傾っていることが見られる。

以上を要するに、家族関係を現す「居間」でもアメリカ人例は特定人物を中心とした物語をつくるし、夫婦関係や性的関係を予期させる「寝室」でも日本人例は家族に象徴される全体的状況を描く場合もあり、アメリカ人例に比して、各画像が独自の役割を遂行する状況は少ないのである。

### むすび

アメリカ人の個性の強さ、顕著な個人主義的態度については多くの面で認められている。他方、日本人の集団共存的な態度もすでに民俗学的文化論や人格論の立場か

ら述べられてきた。それはしばしば家族的な集団の中に隠れつつそれを支えるものである。

この研究においても、僅少例ながら、そうした傾向がMAPSを通じて計測可能な形で捉えられた。この結果は、日本人の主題投影法への反応の解釈に際し、従来のアメリカの研究に見る精神分析的枠組への傾斜に注意を促す。

しかしMAPSの他の諸側面、たとえば物語を読まずに画像配置状況(FLS)によって解釈を試みることの意義とか、画像の位置や画像間の距離などの諸特徴、語り手の動作と物語の関連の検討などは、共通して活用できるところである。また今日の日本人の態度の多様性を顧みるなら、単にアメリカ人との相違点のみを強調することはできない。つまり、固有性と共通性を併せて認識

して、一層弾力的に解釈することが必要になるだろう。

\* \* \*

本研究におけるアメリカ人学生被検者の選択に当っては、上智大学外国語学部の大迫俊夫講師にいろいろお世話になりました。深謝致します。

#### 参考文献

- Shneidman, E. S. (1952) Manual for the Make A Picture Story Method. *Proj. Tech. Monog.* 2  
 台 利夫 (1976) 自我と役割 国学院教育研紀要 11 : 10-22  
 我妻 洋 (1964) 自我の社会心理 誠信書房

—1980. 9. 30. 受稿—

## SUMMARY

### A Cross-Cultural Study of Experience of Relationships on the MAPS Test : A Preliminary Report

Toshio Utena  
The University of Tsukuba

MAPS is a thematic projective test, which, like psychodrama, has the setting, the performance and the speaking all presented in a live context. But the MAPS test developed in the U. S. is a product of American culture and thus has, as a prerequisite, the American tester and the American subject. A hero-oriented approach in the interpretation, for example, corresponds to the American personality but does not necessarily correspond to the Japanese personality. Though the verbal as well as the non-verbal aspects of this test are appropriate to a cross-cultural study, what are the implications of having Japanese subjects in the MAPS test?

The MAPS test suggests a certain human relationship, which is inferred, not only from the story but also from the figure location on the Background Picture. This study focuses attention on the difference, proven by the mode of the experience of relationships, between Japanese and Americans with a given test. The study included 21 American and 21 Japanese subjects, each group consisting of 9 normals and 12 psychotic patients.

For the Background Pictures, an abbreviated

battery was used : living room, street, bedroom, blank card and one other, which the subject was able to select freely.

The results showed the following : the Japanese subjects used more figures, on the whole, than did the Americans. The Japanese specifically placed both child and animal figures with adult figures against 'the blank card', portraying peaceful and harmonious situations. And most of the human relations depicted in these situations appeared to resemble family relationships.

On the other hand, against 'the living room' and 'the bedroom', both groups placed approximately the same number of figures. Two evaluators, both clinical psychologists, after reading the figure location sheet and the story, determined whether the situations portrayed against these two backgrounds were modelled on an individualistic relationship or on a collective, family relationship. The Japanese group here, too, showed a greater tendency to collective orientation than the American.

These findings may be of help in designing interpretations applicable to Japanese subjects in the MAPS test.